
ハロー、コッペリア

才切

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロー、コッペリア

【Nコード】

N1598Y

【作者名】

才切

【あらすじ】

人形狩りの人形の物語。

乳白色が視界を占めている。それが女の背中だと気がつくのに、随分と時間が掛かった。

瞬きを繰り返して、覚醒の実感が染み渡っていく。

俺は隣で眠る彼女を起こさないように、寝台を降りて、自分を起こした元凶へと眼を向けた。

「…何の用？」

目の前の、侍女風の礼装に身を包んだ女に向き直る。女は髪を後ろ手に流し、掻き上げる。

「おはようございます。アダー。朝から仲がよろしいですね」

ちらりと寝台で眠る裸の彼女を見やり、侍女は無感情に告げた。

皮肉でもない、朝の常套句。毎度々々、もう聞き飽きたくらいだ。

「お陰様で。…本題は？ 電話で知らせるっていう選択肢はなかったのか？」

「それだと居留守される可能性がありますので。もう昼の二時ですよ」

「…はあ、それで？」

俺は面倒になって、ベッドに踵を返す。

「世間一般の人間は起きている時間かと。…仕事です」

「何処の、誰を？」

俺は言葉少なく問う。質問なんてそれだけで充分だった。回りくどいのは嫌いだから。

「それはきちんと服を来て、彼女を起こしてからにしてください。わたくしは失礼致します…くれぐれも二度寝しないように」

侍女は言うど、長いスカートを翻して部屋を後にした。

残された俺はもう一度寝台に横になろう…としてやっぱりやめた。

後で侍女にどんな嫌味を言われるか分かったもんじゃない。根に持つタイプはこれだから……

隣で眠る彼女の肩に手を置いた。

「ミュウ、起きろ、朝だよ。…あ、いや昼だっけ…」

軽く揺すると、白金色のセミロングの髪が生き物みたいに動く。柔らかそうな唇が半ば開く。

「んー……」

ぼんやりと彼女が発したきっかり十秒後、うつすらと瞼が開かれた。

「…ん…おはよお…アダー」

一糸纏わぬ姿で、何の気なしに背伸びした。

「おはよう。起き様に悪いけど呼び出した」

「りょーかい…」

彼女——ミュウは手首を軽く回してから、寝台から飛び降りる。スプリングが軋む、音も無く着地。——何だか猫みたいだった。

足元に転がるスーツケースを開いたり閉じたり、ホテルのクローゼットを開いたり閉じたりしながらに衣服を纏っていく。

今日も例外になく白い服。

何時だったか、俺がミュウには白が似合う——と告げてから、彼女は白い服しか着なくなった。俺の気まぐれな文言なんか、そんなに本気にしなくてもいいのに。

二人して手早く着替えを済ませる。

ミュウは櫛で髪を梳いただけで化粧もしない。御陰で起床十分にも満たない内に部屋を出ることができた。

エレベーターで一階のエントランスに向かった。

受付で名を名乗り、面会手続きを取る。

指定されたのはホテルの一階にあるカフェテラスだった。

平日の昼過ぎ。伽藍とした椅子と机の羅列の先に、先程の侍女が居た。

侍女の隣にはどっしりと腰掛ける男が一人。似合わないにも程があるスーツを着込んで、入ってきた俺たちに気がつくとき軽く手を振っ

てきた。何だか偉そうな態度にむかつとなる。

「待っていたよ、アダー、ミュウ」

張り付いた笑みを浮かべるのは俺たちの『後見人』。またの名をエイフ。

胡散臭さを煙の匂いみたいに発する人物へと歩み寄り、ミュウがまづ頭を下げた。

「おはようございます。エイフさん、良いお天気ですね」

「ああ。お元気そうで何よりだフロイライン。アダーとはその後上手くやっているかい？」

「それなりに」

はにかんで笑うミュウは、俺へと視線を移す。催促されるのはあんまり好きじゃない。

「お久しぶりです。：要件をお聞きます」

手短かに告げて、言の裏で急かす。

エイフは顎先を撫でてから、勿体ぶるように煙草を取り出した。

「デルタ。彼らにあれを」

侍女へと視線だけを向け、男はライターを開ける。気化した油の匂い。

呼ばれた侍女――デルタは足元に置いていたアタッシェケースから書類を取り出した。

数枚の印刷紙が一纏めにされた物を、俺とミュウに手渡す。

「詳しくはそちらの書類をご覧ください。今回の標的の個人情報と経歴です」

B4の紙には知らない誰かの名前と、顔写真が載っていた。

一枚目は女、二枚目と三枚目は男だ。いずれも若い。

「特に最初の機械人形――トリシュカは連続殺人犯として指名手配されています。警察はそもそも、彼女が機械人形だということにさえ気がついていませんが」

「連続：？」

ミュウが首を傾げ、トリシュカという人物の経歴を見た。

一月十六日――第一犠牲者：二月一日――第二犠牲者：三月二十四日――第三犠牲者……

一月ごとに殺人を犯している。

今は六月だから、一月から始まり六人も人間を殺している。

エイフは紫煙を吐き出し、鷹揚に頷いた。

「困ったことだよ。これは怨恨の類じゃない、きっと故障して、人物識別機能が御作動を起こしたんだ」

「どうしてそう思う？」

視線を上げると、自慢気なエイフと眼が合った。

「そりゃあ、被害者に共通点がないからね。女男、子供、老人：浮浪者から州知事まで、お構いなしさ。もっぱら世間では、無差別殺人犯として取り扱われてるよ。ニュース見てないのかい？」

生憎、俺もミュウも古い映画しか見ない。

補足とでも言いたげに、デルタが付け足す。

「凶器は恐らく鈍器でしょう。銃や暗器を装備していない可能性が高いです。しかし機械人形です。腕力だけでも成人男性の十倍近いと思われます」

「十倍：凄いね……」

ミュウが耳打ちしてくる。

機械人形は文字通り人間ではない。生体人形でないのならば容易く可能だろう。

「犯行の内、一件は、鈍器ではなく素手で殴られたことによる致命傷です。拳に何らかの加工でもしてあるのでしょうか。遺体は人相が分からない程だったそうです」

要するに、袋叩きに遭って挽き肉にされたということか。

「他二人については、まずトリシュカの討伐が済んでから順を追ってお知らせします。優先順位は彼女です」

侍女は一旦、エイフの背後に引いた。

「期限は？」

「取り敢えず、七月までだ。彼女が次の犯行に移る前に狩り取る必

要がある。…引き受けてくれるね」

俺とミュウは同時に頷く。どうせ選択権なんてありはしない。

煙草を机上の灰皿に押し付け、エイフは立ち上がった。

「協力感謝する。彼女の所在地はリストの通りだ。暫くはこのホテルを使いなさい。その方がこちらも連絡が取り易いからね」

デルタが静かに礼をして、去っていく男の背後に続いた。

…全く、いいご都合主義だ。利益なんか全部吸い取ってるクセに。少しは寄越せ。

内心の毒吐きは面には出さない。

男の姿が見えなくなってから、ミュウが上目にこちらを窺う。

「アダー、この依頼って、もしかして警察からかな？」

警察が、『人形機関』を頼るだろうか。

少なくとも異端者でもなければ、公僕は俺たちに関わらない。

「どうだろうな。昨今では、機械人形に造詣が深い警察官も増えてきたらしいけど…」

冗談半分で言い流し、足を組んで椅子にふんぞり返る。

機械人形について、一般の人間が抱いている印象は実に簡単だ。

——人間に仕えるもの、役に立つもの。

従来から機械人形は人の世話をして侍従の代わりになり、護身にもなる。性道具として重宝される生体人形や、芸術品としての美しさを追求した古式人形…様々な用途のものが生まれ、飽きられ。また新しく作られていった。

しかし人間よ、奢ることなかれ。

昨日美味しい紅茶を注いでくれた従順な人形が、幼い子供の子守をしていた優しい人形が、災害現場の危険作業を黙々とこなす義理堅い人形が、男に向けて婀娜っぽく股を開いた遊戯人形が——

何時、人間に刃向かうのかなんて、誰にも分からないのだから。

機械人形は本当に進化した。生体人形については特に、人間と区別なんてできない。

粘膜や肌質まで再現した狂気の産物。そうでなくでも機械人形と名

のつく存在は、服さえ着て黙っていれば人間と変わらない。
だからこそ、恐怖だ。

今まで人間だと思っていたのが、人形だった……なーんて、ね。
線引きがあやふやになってしまったら、もう戻れない。

それを俺とミュウはよく知っている。

「今日はもう寝る。明日から頑張ればいいだろ？」

ミュウが眉を吊り上げる。怒った顔も可愛らしい。これってある意味脅威だ。

「またアダーはそんなこと言って……」

「俺は眠いの。ついこないだまで過労だったんだから、少しくらいサボったって文句なしだ」

隣の彼女の肩を叩いて、テラスを後にする。

「折角、着替えたのにー……」

ぶつくさと文句を言いながら、けれどミュウも後に続いた。

works

「すみませーん、書き留めお願いしまーす」

間延びした声を発して、何だか自分、馬鹿っぽいと思う。けれどこれも仕事。しょうがない。

外は雨が降っている。玄関の廂に雨宿りして、袖口に被さった雨雫を手で払った。

「どなたかいらっしゃいませんかー？」

俺は再度告げた。

返事——無し。

後ろを振り返ると、ミュウが運搬車の運転席からこちらを窺っていた。

『アダー、返事ないの？』

『うーん。悲しいくらいないな…』

頸椎の後ろにある通信機から、音声の頭に直接響いてくる。

『突入していい？』

このまま門前払いを喰らうのもなんだか癪だ。俺はそう提案し

『だーめ。もっと粘りなさい』

彼女のそんな台詞に唸る。

白壁塗りの民家は、街の郊外にあった。ベッドタウンというやつだ。都心で働いている者たちはこの近隣に家を持って家族と住んでいる。文字通り、帰って寝るための家といったところか。

無論、用もなしにそんな場所に来るはずもない。

「すみませーん！」

俺は一際大きな声を出す。

すると、歩道の方から人の気配がした。

見ると、若い女性が一人、こちらを訝しげに見つめている。やばい、バレたかも。

そんな俺の心配を他所に、女性はぽつりと告げた。

「その家の方：引越されましたよ？」

「え？ それって何時の話ですか？」

「随分と前。もう、二月は前になるかしら。：郵便ですか？」

俺の全身の格好を見て、彼女は少し警戒を問いたようだった。ぽつと見ではありがちな郵便局員だからね。

脇に止めていた運搬車から、ミュウも降りてくる。軽く女性に会釈して

「わざわざすみません、私たち何も知らなくて」

いえいえ、お構いなく。と女性は手を振った。俺も繋いで言う。

「書き留めを頂こうとしてたんです。でも、それならしょうがないですね…」

俺とミュウは頷きあって、空っぽの箱を抱え上げた。

『どう思う？』

体内通信でミュウが問う。

『嘘くさい』

俺はそうとだけ答えた。

時刻は夜――

俺とミュウは再び同じ家を訪れていた。

夜半に再び訪れるくらいだから、勿論それなりの理由がある。

今度は郵便局員だという誤魔化しもなし。仕事柄変装はよくするけれど、だからって趣味なんかじゃない。断じてない。

ミュウが扉の前で立ち止まる。

ピッキング用の工具を取り出し始めた彼女を制し、俺はドアノブを捻った。

――呆気なく開いた。

「…鍵、掛かってないんだ…」

「行くぞ」

囁いて、俺が先に玄関に入り込む。

明かりのない視界——けれど夜目が効く俺たちには問題ない。

玄関の先は廊下、階段、奥にはリビングがある。一般的な家の構造。特に変わった所はない。

けれど、地下室があったり、本棚をずらしたら入口があったりという小細工がないとも限らない。確認作業の為にある程度の家探しは致し方ないだろう。

最初にリビングへと入る。クッションやテレビ等の家具はそのままに残してある——本当に引越した後なのだろうか。生活感が色濃い。怪しい。

冷蔵庫を開けると——電源が入っていた。これは、おかしい。

「…誰か、居るな」

「うん」

警戒心を最大にして、進む。キッチン、トイレ、バスルーム……続いて、二階へと上がる。

二階は一階とはうって変わり、閑散とした部屋が二つあるだけだった。どちらも広く、家具などは全くない。使っていないのだろうか。廊下を挟んで向かい合う部屋の一方に入り込む。

窓には不自然に長いカーテンが掛かっていた。

「——アダー！」

途端、カーテンを突き破る何かが、こちらに突進してきた。

ミュウの悲鳴もあり、寸でのところで躲す。あぶないあぶない。

安心する間もなく、今度はミュウへと突っ切っていく影。しかし、

正確無比な一撃により進撃を阻まれた。

俺はデザートイーグルを引き抜き、それへと発泡した。

影はよろける。どうやら肩を撃てたらしい。

俺は迷いなく、一瞬の隙を縫って影へと体当たりを食らわせた。

「——ッ！！」

対象が息を呑む。

ミュウが、とどめとばかりにブッシュナイフを影に突き立てた。
生暖かい液体が、頬に飛ぶ。

そこで、やっと俺は組み伏せている相手の顔を見た。

「――やっぱり、そうか」

闇から襲撃してきた相手は、今日の昼間に挨拶を交わした女性だった。

彼女の様子からして、近隣の住民かと思ったが、それには不自然だった。この家は、ベットタウンの更に郊外に位置するのだ。これより先に家屋はない。

ならば、この家の住民という可能性も否めない。

「……ッ！　ぐ……」

肉厚なナイフで首を半ば切り裂かれながらも、女は抵抗を続けた。しかし、俺が要点である関節を抑えているので、それは無駄な抵抗に終わった。人形の身体だって、基礎骨格は人間のを模倣しているのだから、呆気ない。

ミュウは女の元に膝を着く。

「顔を整形したんですね……トリシユカ。どうりで分からなかった……」
「どうして……ッ！」

女は驚愕に眼を開いた。自分の製造名を知っていることが不思議なのか。

「あんたは、人を殺しすぎたんだよ」

俺は親切にも教えてやる。どうせ一息に頸椎を折れば、人形だって冷却液が漏れて死ぬんだから。なら命運は決まっている。

「あ、あなたたち……人形機関の……！」

激しく暴れる女をそれ以上の力で押し付けて、問いかける。

「どこの復讐人形だ。製造者と製造番号を答えろ」

「い、いや……！　死刑人形……助け……」

思考回路がショートしたのだろうか。女人形は狂乱している。なかなかよく出来た人形じゃないか。取り乱し方が、まさしく人間のソレだ。

「無理無理。機関の鉄則は知ってるだろ。どうでもいいから質問に答えて」

「駄目……！ それは……」

泳いでいた機械人形の目が、ぐるりと反転して白目を剥いた。口端から、液体が漏れる。

「畜生、まただ……」

俺は人形の屍の束縛を解いて、飛沫した液体を拭った。

足元の人形は、もう動かない。

理由は簡単。おそらく特定の情報が引き出されようとするれば、可動停止するように出来ていたのだろう。復讐人形を作り出す人間が考えつきそうな姑息な手だ。クソツたれ。

ミュウは女の瞼に手を翳し、閉じさせてやる。

「今回も、駄目だったね」

「今回は、な。次は……次は駄目でもその次があるだろ」

「うん……」

悲しげな彼女の横顔を見て、肩を抱いてやる。

触れた肩から伝わるのは、温かさ。作り物だったとしても、確かに暖かい。この温度には何時も救われる。

復讐人形——文字通りだ。捻りも創作性の欠片もない、そのままの呼び名。

人殺しの人形だ。人殺しの為に作られた機械人形。自らの復讐を人形にさせる……そんな思考回路の人間が大勢いる。本当にふざけてる。便利な道具なら良い。作業の道具なら良い。快楽の道具なら良い。けれど、殺人の道具にして罪を人形に被せて逃げるなんてのは、規則違反だ。

機械人形は人間の手によってつくられる。自律人形だって人を殺すなんて最初から設定されているものはいない。誰かがそれを歪めてやって、初めて殺人人形が生まれる。

そして、人形の汚名は人形が拭ってやらなくてはいけない。

人形機関に属する人形は、云わば模範生だ。

本来人形にあるはずのない、道德なんてものを身に付けている。そんなものは重荷になるだけだというのに。

暫く起動停止した人形と同じ部屋に居た。

更にもう暫くすると、音も無く来訪者が現れる。

「お疲れ様です。お二人とも」

侍女服姿のデルタが闇夜から現れた。ミュウが体内通信で連絡したのだろうか。

デルタは相変わらずの無表情を足元の人形にやり、手早く傷の状態を確認した。

「記憶媒体ごと自主破壊していますね。情報を引き出すのは無理でしょう」

言うのと、がしやがしやと音を立てて人形を担ぎ上げた。滴る体液がデルタの肩元を汚すが、彼女は一向にお構いなし。

「またの召集まで、どうぞ休まれてください」

侍女は一例すると、ガラクタみたいな女人形を担いだままに退室した。

やってくる、仕事のあとの虚しさ。

黙りを決め込んでいたミュウが、女機械人形が残っていた部品の欠片をつまみ上げる。

「…帰ろっか」

欠片をポケットにいれ込む彼女に何も告げずに、俺は彼女の額に口付けた。

「――ああ」

どうせ、帰る場所なんて決められているのだけど。

concept

ミュウは身体を丸めて寝ている。

乳白色の裸体は柔らかそうで、実際触ってみるとほのかな弾力がある。温かみも。

髪を梳いても反応はない。先に眠ってしまったらしかった。

二人で共に眠りに付ける夜はいい。しかし、どちらかが先に眠ってしまえば、長い間を一人で過ごす羽目になる。

睡眠なんてものは、日中にあつたことの情報処理に過ぎない。

けれども、睡眠は確かに精神安定の薬だ。これがなかったら俺たちの生活はもっと悲しいものになっていただろう。

ミュウが寝息混じりに何かを言う。

寝言だ。何か良い夢でも見ているのだろうか。

しかし人形は夢を見ない。きっと、楽しかった過去を追体験しているだけだろう。しかし、俺と彼女に楽しかった過去なんてあっただろうか。

頭をそつと撫でてやると、擦ったげにミュウは寝返りをうった。

現れた滑らかな背中には、製造番号と真名が刺青されている。

ミュウは機械人形だった。けれど、俺も同じ存在だ。

機械人形と機械人形の取り合わせなんて、まず有り得ない。前代未聞かもしれない。

人間と酷似した肉体を持つ生体人形は、夜に客を取ることはあれど、どちらか一方が人間であることが前提だ。奉仕者と主人の関係は何時だって不可欠だから。

だというのに、人形と人形なんて、今時笑い話にもなりはしない。俺もミュウもよくできた生体人形だから、粘膜もあり生殖機能以外は一通り取り揃えてある。よくすれば人間がやるようにすることもできる。

けれど、だからといって何の価値があるのか。一回試したけれど、体に悪そうなのでやめた。

ミュウと一緒に寝れるだけで俺は充分なので、正直内容に興味はない。

彼女もそれは同じだと思う。

偽りでも、暖かさが欲しいだけだ。それ以上は求めていない。

ミュウと俺は同じ家で育った。

人形師の家。人形協会のはぐれ者の異端術師の箱庭だ。

生まれた時からこの外見で、気がいたら唯二人しか居なかった。

俺たちを作った人形師は死んだ。俺たちが最後の遺作品となったわけだ。死んだ人形師に敬意は払うけど、別段思い入れもない。父親の顔なんてそもそも知らない。

人間じゃあるまいし、生まれたてでも、人形は泣き叫んだり、立ち上ろうとして失敗して転んだりするわけじゃない。

上手く世間を渡っていく方法だってそれなりに知っている。

そもそも、食料や睡眠をまず必要としないのだから、別に環境が劣悪でも存在してられる。

俺たちが今頃になって睡眠を異常に取っているのは、単純に暇だからだ。

最近気がついたことなのだけれど、暇は人形さえも殺すらしい。

ミュウの首筋に額を当て、微睡みを待つ。

微かに甘い香りが鼻孔を掠める。

ずっとうして眠っていられば良いと思う。

人形殺しの人形なんて詰まらない肩書きから離れて、お互いがお互いの為だけに存在していられば、それだけで充分だった。

これは、きっと我俣なのだろう。

だから、微睡みの瞬間だけに思う、浅はかな寝物語だ。

しかし、それでもミュウが俺の全てであることに、変わりはない。

about

依頼書を眺めながら、車の硝子縁に肘を掛けて、頬杖を着いた。

隣のミュウは真っ白なドレス姿で同じ内容の紙面を見ている。露出度の高いビスチェドレス。本当によく似合ってる。似合いすぎて困るくらい。わざわざ選んだ甲斐があった。

前の助手席に座るデルタは、相変わらずの侍女服だった。エイフの趣味か、命令か。はたまた、一着しか服を持っていないのだろうか。きつい首元に指を挿し入れながらそんなことを考えていると、長い渋滞がやっと動き出した。

街の光が溢れ帰り、渋滞もなんやの勢いで洪水を起こしている。クラクラしそう。これじゃ夜景酔いだ。

スーツに包まれた足を組む。

「デルタ、本当にこんなのでいいのか？」

ミュウも俺と同感らしい、引き継いで話す。

「私は構いませんけど…上手く行きますかね…」

デルタは鷹揚に頷いた。

「いろいろと考えました結果、今回の方法が最も効率的かと。お二人には不本意な仕事でしょうが、一番安全性が高い方法でもあります。件の屋敷の防犯は重厚です」

ミュウが唸る。

考えていることは分かる。けど、あえて口にしない。口にしないことで信頼が保たれると思っているのだろうか。俺も、彼女も。

「アダー、ミュウ。あなたたちは云わば人形機関の顔です。どうか模範的な行動を」

「分かってる」

いい加減疎ましい文言に、気だるく答える。

隣のミュウは何か元気がない。

「緊張してるの？」

「そんなんじゃないよ……アダー……」

彼女は何か言いかけて、止める。

口にしかけたその言葉の先が、手に取るように分かる。

「辛気臭い顔しないで、ほら、折角の美人が台無しだぞ」

おどけて言った俺の顔を、じっと見つめる――視線。

「大丈夫だって。明日、帰ったらこれ程かっつくらい寝まくって、
んで、目が覚めたら映画見に行こう。ナイトショー。どーせこれも
途中で寝ちゃうと思うけどな」

「……約束したからね」

「勿論」

ここで、やっとミユウは笑った。

全く、どこまでも人間らしい奴だ。

これが全て人間の手によって設定されたものだって、疑いたくなる。

窓の向こう側にある喧騒を眺める。

都心の明かりは目に毒だ。人形の目にも毒。人間にも毒。じゃあそ
んなものは消してしまえばいいのに。

ゆったりと車が交差点を曲がる。

運転席の人形は車両運転専用の機械人形だ。完全なる安全運転とい
う名目で、富裕層にも受けが良いという。しかし自律人形と違い、
出来ることは車の運転だけだけだ。

そもそも、俺たちのような存在が異質なのだ。常にそれを筆頭に
考えなくちゃ、やってられない。

人形機関の人形殺しの死刑人形。

物騒な肩書きの割には、最も人間らしい人形が役目を務めているも
のだ。

人形を乗せた車が速度を落とす。

横付けにされる形で止まると、目の前には聳え立つビルがあった。
百階以上あるだろうか。明らかに富裕層向けの見せしめの産物だっ
た。

俺とミュウは人々が行き来する入口をくぐり抜け、中へと入っていく。侍女と運転手の役目はここまでだった。後は言われたとおりに行動すれば良い。

十階まで吹き抜けになった壮大なロビーには、着飾った男女が所々で屯している。

壁際には、一人、見知った顔があった。

「――やあ、アダー、ミュウ」

気軽に声を掛けてくる、紳士然とした男――エイフが居た。

ミュウがまず淑やかに礼をする。

「こんばんはエイフさん。お早いですね」

「場には早く馴染んだ方が良いだろう。それにしても麗しいねフロイライン」

「お褒めに預り光栄です」

割って入る形で俺は告げた。

「それで、件の人物は？」

「まだいらっしゃってないようだ。まあ、慌てる必要はないさ」別に慌ててなんかいない。さっさと終われと思っているだけだ。

ミュウが俺の傍らにそっと寄り添う。

傍目から見ると、俺たちは精々、人間の恋人同士くらいにしか見えないのだろう。

ミュウが露出度の高いドレスを着ているのは、自らは人形ではない――もしくは限りなく人間に近い存在なのだと誇張するためだった。それで相手の猜疑心が消えるのなら彼女は幾らだって肌を晒すだろう。いや、勿論俺が止めるけれど。

吹き抜けになった空間には像が立っている。

一本数メートルという巨大な人物像が点在し、そのどれもが女を象っていた。

俺たちの一番近くにある像は、女神というよりは天使に近い少女らしい像で、座盤には題名が彫られている。

見ていると、ミュウが不貞腐れた顔で呟いた。

「年下が好み？」

「まさか」

軽く笑って、腕にしがみつく彼女を見た。

俺と彼女は、見た目同年齢に作ってある。高く見積もっても二十代前半が良いところだ。

「まあ、ミュウなら何歳でも構わないけどな」

「：悔しいけど、同感かな」

するりと腕が抜かれる――と、同時に人の気配がした。

こちらへと向かってくる一団。

「見えたようだよ、二人とも」

エイフが囁く。

一団はまだ若い男を先頭に使っていた。

「件くだんの人物。ミュウ、あれがウォーカー氏だ」

告げた途端、ミュウの表情が僅かに強ばった。

歩み寄って来る若い男は、まずエイフへと視線を向け、それから隣のミュウに目をやった。

一瞬だけ浮かんだ色。どうしてか嬉しそうな色。

「初めまして、ミスター・エイフ」

「お初にお目にかかります。ウォーカー様」

若い男はエイフへと歩み寄り、握手を求めた。エイフも手を差し出す。

ウォーカーの名は車内で見た書類で知った。特権階級の生まれにして事業成功者。折り紙つきの富裕層だ。事業の才能があり、今は父兄の会社の跡継ぎ候補だとか、云々。

そして、そんな無駄な情報よりも、眼を引くものがあった。

彼は人形性愛者だ。

人間が人形と関わってきた歴史は長い。機械人形が誕生してからは特に人間と人形の距離が縮まった。

機械人形から派生した生体人形が生まれると、機械人形の役目は単なる労働だけに済まなくなっていく。

それ故、時折歪んだ性愛を持つ者が生まれてしまう。
彼がそれだ。人形にしか欲情できない、可哀想な欠陥人間。

俺がその情報に眼を通した時、不快感と納得が同時にやってきた。
つまり、人形機関の代表というのは仮の名目であり、自分たちは御
機嫌取りに使われた。

ミュウは今夜、この男に抱かれるだろう。

だからこそ、不安げな表情で俺に助けを求めてきた。

でも、どうしようもない。これは目的を果たすための手段であって、
仕事の内だから。

エイフに促され、ミュウがウォーカーの前に立った。

「初めまして、ウォーカー様」

華やかなる完璧な笑顔の裏には、滲み出る嫌悪。心底嫌そうな雰囲気。
どうせ、俺にしか見えていないだろうけど。

ウォーカーは穏やかに微笑んだ。

「ああ、君か：フェーダクトの遺産人形というのは」

少なくとも、顔には出さずに俺は狼狽したと思う。

人形師フェーダクトの遺産人形――これは俺たちの個人情報や薄っ
ぺらい経歴の中で、一番の秘匿事項だった。

呪われた人形師フェーダクトの遺物。放っておけば闇オークション
の競りに出されるところを、人形機関の幹部であるエイフに拾われ
てから、あいつの名は一切口に出していない。

反射的に隣の男を見る。しかし、エイフはウォーカーを見つめたま
まだった。

「残されたフェーダクトの機械人形は君だけだと聞いた。逢えて光
栄だ」

「勿体ないお言葉です」

可憐な笑みを浮かべ、ミュウは瞳を伏せる。

君だけ、ね。俺も一応、あの狂った人形師の遺産なのだけど。わ
ざと嘘を吐いているのか、本当に知らないだけなのか。

ウォーカーはミュウの耳許に唇を寄せ、不意に囁く。

「――今夜、僕の部屋においで」

「……………」

ミュウは相変わらず微笑んだままだったけれど、ウォーカーが去っていった後に肩をがっくりと落とした。そりゃあ、あんな陳腐な台詞言われたら、誰だって脱力するよね。

「うえー………」

小さく嘆いてから、ミュウは破顔する。

恨めしげに俺を見るけど、あんまり暗い視線を送らないで欲しいな
ー…なんて。

俺が悪いわけじゃないし、そもそもミュウが他の男に抱かれるなんてまっぴら御免だった。

でも、だってそれ、仕事だからしょうがないじゃないか。人形は与えられた役目をこなすだけだろう？

snow

真っ直ぐに、無感情に、無表情に、何の感慨もなく、何の想いもなしに、ただありのままに、空っぽに、清々しいくらいの虚無を持つて。

――私は天井を見つめていた。
寝台に広がった髪がうねる。

ぼんやりとした瞳だけが、硝子玉みたいに豪華な革張りの天井の一点を見つめる。

視界の隅に映るものは、一切眼中にない。

たとえ私の肌を舐め這いずり回す手や舌があろうとも、本能的な行為に執着する雄がいつとも、下腹部の圧迫感が増していくだけだとしても。関係ない。他人事みたい。

目も合わせない。声も出さない。

何も感じないし、そもそもそんな機能は私には無い。

ああ、これだから嫌だったんだ。

人形に還って乖離した意識を繋がないといけない。まるで幽体離脱したみたい。冷静な私が向かい合わせになって冷たい現状を把握していく。

熱を帯びた息の根が煩く響く。目端に映る人間の男は、人形にでもその気になれるらしかった。

寧ろ、人形でないと駄目なのか。私にはどうでもいいことだけど。とにかく早く帰りたい。今すぐ帰りたい。帰ってこんな体液まみれの身体を洗い流して、彼に抱き直してもらいたい。

彼は眼前の男のように機体に悪そうな行為はしないし、息を荒らげなければ気持ち悪い生理現象も起こさないし、私をそっと抱きしめて寝るまで一緒にいてくれる。それだけ。でも、それだけで充分だった。他に何も要らないくらいに。

私は人形だから。比喻でもない、良く出来た生体人形。

見た目はまったくの人間で、裸になろうとも私が人形だと分かる者はいないだろうし。

人工皮膚や筋肉には新陳代謝の機能まではないので、怪我をしてもそのままだし、爪が伸びたり汗をかいたりすることもないけれど、食事は必要としないから消化器官は無いし、睡眠も本当は必要ない。私たちを作った人形師は、医者で、解剖学者で、エンバーミングの知識も備えた異端者だった。

人間と人形をごっちゃにした探求者。彼が最後に遺した狂気の産物が私たち。

『μEWO2』——通称ミュウ。

『AdriisPOO』——通称アダー。

目が覚めた時にはもう、自分が人形だと知っていた。

設定された意識は既に人間の成人程の人格を持ち合わせており、すぐにでも人間社会に溶け込める程だった。

そして、他の人形には無いものを一つだけ与えられた。

私たちは人形を処刑する人形だ。

人形の最大の罪である殺人。それを犯した人形を始末する必要悪の仕事人。

エイフは何故、私たちを処刑人形に選んだのだろう。考えても、しようがないことだけど。

私の胸に顔を埋めていた男が、面を持ち上げる。

唇が重なり、湿った粘膜の感触で犯される。

「……………」

特に感慨もなく合わない焦点を引き絞った。

闇夜でも私の目にはしっかりと見える、部屋の情景。脱ぎ捨てられた衣服が散乱している。私の着ていた白いドレス。もう汚してしまった。あれ、アダーが選んでくれたお気に入りだったのに。

もう、着れない。

それだけが悲しかった。

——また、新しいのを選んでやるから。

：そう言って、だから気にするなと私の頭を撫でる彼の顔が浮かんだ。そうだと、良いと思う。

どのくらいの時間が流れたのだろう。

男は伏している。情事はもう終わったのだろうか。なら、早く身体を洗って退散したい。

彼はうっすらと瞳を閉じている——力尽きて眠りに着いたのか。

私は裸のままのっそりと起き上がり、髪を横合いに掻き上げる。

後引くシーツを払いのけて、そのまま洗面所に向かった。

さんざ飲まされた体液を口から吐き出して、造作なくうがいをする。水場続きの豪華なバスルームに入って、蛇口を捻る。

「——ふー……」

文字通りの息抜きだった。

全く、エイフも人使いが荒い。彼との契約のことを思えば、多少の労働は致し方ないのだけど。

身体の汚れを禿ぐつもりで湯を浴び、浴室を後にする。

寝室に戻ったはいいいけれど、汚したドレスを身に纏う気にはなれなかった。

かといって全裸でホテルをうろうろする訳にもいかない。さて、どうしよう。

唸って迷った挙句、私は結局ドレスを手を取った。

液体が着いた箇所を何の躊躇もなくびりびりと破いて、床に捨てる。たぶん：着れないことはない。

嫌悪感を感じながら袖を通し、ハイヒールを引っ掛けて身だしなみを整えてから部屋を後にした。もう用はないし、ご機嫌取りだって終わった。役目を果たしたんだから、後は私の勝手、自由時間。ああ清々する。

大きな伸びをして、ホテルの廊下に出る。最上階スイートの前廊下だから、作りの幅広で豪華。全く、無駄なところにお金をかけるよね、人間って。

一人でエレベーターに乗る。

硝子張りの筒状の昇降機。夜景がよく見える。眩しい。

中々に壮観な明け方の俯瞰景色。一眼レフを持ってくれば良かったな、なんて今更に後悔。デジカメも車に置きっぱなしにしてきてしまったし。

電子音が鳴って、扉が開く。

エレベーターから降りて、エントランスをそのまま抜ける。殆ど明け方よりの夜更けだというのに、エントランスには数人の人間が居た。何か話している。こんな時間帯に、薄手のドレスで外に出ようとしている私を訝しむ眼を向け、すぐに談笑へと戻る。厄介事には関わらない主義、見習いたいね。

少し肩を竦めて、自動扉を潜った。

肌から感じる体感温度、18度。――ちよつと寒いくらい。まあ、人形の私には関係ないのだけど。

あー、やだやだ。こんな夜更けに迎え待ちかあ。

壁に背をくつつけて、耳を澄ます。

すると、遠くから排気音が聞こえてきた。この音、聞き慣れてる。すぐ分かった。

「おっそいなあ…」

眩くと、単車で乗り付けた彼は私の目の前で止まった。

フルフェイスのヘルメットを脱ぐと、短い金髪が現れる。精悍な顔つきも。

「悪いな」

「もっと悪びれてよね」

「…ほんとに、ごめんて」

気を遣っているのか、彼――アダーは申し訳なさそうに応じた。

私はヘルメットを受け取って、バイクの後ろに跨る。特殊改装済の大型バイクは二人乗っただけでは傾ぎもしない。

アダーの背にもたれ掛かって、腹部に腕を通す形で掴まった。

「しっかり掴まってるよ」

「分かってるもん」

唇を尖らせて拗ねてみせる。

私の返事を皮切りに、バイクは走り出した。

よく考えてみたら、単車を運転する人形って珍しいなと思う。それにアダーは最初から単車操縦の操作プログラムが入力されていた訳ではない、自ら教習を受けて免許を取ったのだ。人間に混ざって改めて思うと、凄いことなんだろうな、やっぱり。

立体構造の高速道路をバイクは行く。

ドレスが風にはためくけど、気にしない。ヘルメット越しに湾岸が見えた。

回す手には体温が伝わってくる。暖かい。

風と、全身が引っ張られるような引力を感じながら、力を抜いて身を任せる。

アダーと初めて二人乗りをしてツーリングに出掛けた時に注意されたことだった。単車で二人乗りする時は、後ろに乗る者が力を抜いて、無理に体勢を直そうとせずに、一個の荷物になったつもりでいること。後は操縦者がどうにかしてくれるから——って。

だから、後はアダーを信頼して乗っていれば大丈夫。

身を任せ、眼を閉じる。

風鳴りの音が轟々と耳朵を掠める。激しく、強く。

それすらも、今はただ心地良かった。

design

四角い画面の中の女は、甲高い悲鳴をあげて古い館を後にした。画面が暗く沈み、エンディングとスタツフロールが流れていく。沈鬱な曲調と、黒地に白の文字。

ソファ―に座り、俺の肩に頭を載せたミュウが呟いた。

「何か、変だよね……」

何が、と視線で催促する。

「だってさあ、ユーレイが出るって途中から分かってたんでしょ。

なのに、あの人たちはまたあの家に帰るんじゃないの」

「……まあな」

曖昧に返事を返す。

彼女が話しているのは、今見ていたホラー映画の話。

映画の内容はありがちなもので、古い館に引っ越してきた一家が、人ではない何かの存在に気がついていき、恐怖に陥るという内容だった。

序盤は、登場人物が一人にいる時に、一人で扉が開いたり、皿が落ちて割れたりする程度だったのだが、その内人影をみたり、家族が次々に体調不良を訴えるようになるなど、どんどん自体は悪化していく。

客観的に言うなれば、ミュウの言うことも頷ける。というか、普通ならそう考える。

そこに何か居ると分かっていたのなら、とっとと引っ越せば良かっただろうに。

結局、物語の終盤は家族が病に伏していき、霊能者が雇われる。「この家は、死刑場の跡に建てられているわ……」なんて語った時は、中々に迫真の演技だった。

でも、なんだかしっくりこない終わり方だった。

これなら性質の悪いパニックホラーの方が良かったかも知れない。二人でいろんな映画を見てきたけれど、大概、ホラー映画ってやつはカビ臭いか、血なまぐさいかに分けられる。無論、今回ののは前者だった。

ミュウはスタッフロールを眺めながらに唸る。眉間には皺。どうやら納得がいかないらしい。

時々謎解き要素のある映画も見ろが、彼女は毎度々々、頭を傾げてやはり唸る。

二人しての映画鑑賞は何も今に始まったことではなく、俺たちが人形機関に属して、有効な自分の時間が持てるようになってから見るようになったものだ。

気になる映画を借りて、朝までホテルや宿泊所のテレビで見る。大概、途中で眠ってしまうのだけど。まあ、それも二人ならいいかなと思っていた。

人形機関に加わってから、ミュウはカメラを手にも外を歩くようになったし、俺も人間みたいに免許を取ってバイクを運転するようになった。人形の趣味なんて珍妙で胡散臭いものだけど、内容は至って健全だ。

見た目が人間に限りなく近いと、やはり趣向も似てくるのか。

ミュウは不意に、俺の膝に頭を載せる。

「うん、適度な硬さ。良い枕だわ」

「おいこら、普通逆じゃないのか？」

彼女の滑らかな額をつついて、顔を顰めてみせる。けど、ミュウは至って平然としている。

「後でアダーもちゃんと膝枕してあげますよー、でもまあ、たまにはしてもらうのもいいかなって」

ミュウは瞳を閉じて静かに吐息をつく。

彼女なりの甘えなのだろうか。

昨夜、身を売った彼女を、俺は止めることも助けることもしなかった。

それについて彼女は怒らないし、触れない。暗黙の了解だったから。けれど、俺だって彼女が人間にいいようにされるのは御免だったし、仕事でもなければ必死に止めただろう。

人形も人間も呆れるくらい沢山いる。でも、俺が愛しいのはミウだけだった。

いつからだろうか、分からないけどミウじゃなきゃ駄目だって、そう感じていた。理由なんて知らないし、あったところできっと、今の思いに変わりはない。

金糸みたいなミュウの髪を撫でて、額に口唇を当てた。

うつすらと瞳を開けた彼女が、はにかんで笑う。

「おやすみのキス？」

「もう寝るの？ お嬢さん」

どーしよかなー…と間延びした返事を聞く。

彼女は違う男と寝た次の夜もこうして笑う。無理をしているのか、気を遣っているのか：よく分からない。

「いいけど：お布団で寝なさい」

俺の言葉に、ミュウは可笑しそうに身を振らせた。

「もー、保護者みたいなこと言っちゃって」

身をずらして、ミュウの身体を抱え上げる。まるつきり脱力してぐったりとなった身体。されるが儘といった様子。疲れているのか、だれているだけなのか。

身体をベッドに下ろしてやると、ごろごろと端に移動した。

どうやら、俺も一緒に寝ろということらしい。

向かい合うように寝台に横になると、ミュウは満足そうに呟いた。

「おやすみなさい。アダー」

「おやすみ」

微笑みの残滓を残したままに、彼女は瞼を閉じる。

その顔を見ながらに、俺は静かに息を吐き出した。

any

「――以上からして、ウォーカー氏が殺人人形を匿っている可能性は非常に高いかと」

侍女服姿のデルタが告げると、辺りの空気が一層引き締まったような気がした。

人形機関の重鎮が重苦しく渋面を上げる。

「確かなのだな」

「十中八九。それをミュウが証明してくれました」

唐突に名を出された隣の彼女は、分かり易く狼狽える。目線を頼りなさげに回し

「いや、その…」

何か言おうとすると、お構いなしに侍女は遮り話し続けた。手に持ったビニールの袋を掲げ、中の糸状の物を指し示す。

「ウォーカー氏の部屋から検出された毛髪。これは人工毛です。おそらく、彼が懇意にしている人形のものでしょう。そして、件の連続殺人の現場からも同じものが見つかりました。性質はまったく同質のもの――つまり、同じ一体の人形のものです」

その話なら、俺も前もって聞いていた。

ミュウが夜の相手をした男。本当の目的はご機嫌取ではなく、この裏付けを得る為だった。案の定、希少価値の高い機械人形という餌にされたミュウ。全ては彼の私室に踏み入る手段だったのだろう。機関の考えることは本当に狡猾だ。

しかしこれで、連続殺人を犯した人形と、その誰かがイコールで繋がった。

だから、ウォーカーが殺人人形を匿っているのだとデルタは語る。

「本来ならば逮捕礼状は無理でも家宅搜索願を出すべきなのですが、

あちらの権力と財力、人脈を鑑みるに、難しいでしょう。警察が腰を上げてくれるとも考えられません」

清々しいくらいにきっぱりと警察の賄賂を肯定し、デルタは尚も続ける。

「ですので、今回の作戦は本当の意味での隠密行動となります。現地で失敗を庇ってくれる者はおらず、窮地に立たされた際にも人形機関は一切関与できません。：いいですね、アダー、ミユウ」

一応、といった具合に二人して首肯する。

よく考えてみたら、随分と白状な説明だった。今回の仕事は完全な孤立無援の中で行われる。条件は多く、制約も多い。

二人きりに慣れた俺たちでも、孤独感を感じるほどに。

人形機関の重鎮たちは、もしもの時は俺たちが代わりに責任を負って、切り捨てられると知った御陰か、心底安心したような表情を滲ませている。

——人形機関。

機械人形が発展するにつれ出てきた、人間と人形の関係の調律を行う非営利組織。

人形を造り、進展させていくことを目的とした人形師の集団でも、人形機関に反発するか否かで派閥が別れる。

人形機関が発足されたのには、とあるきっかけがあった。

機械人形が人間社会に充足していったのと同時に、人形の誤作動による不慮の事故が相次いだのだ。

しかし事故は事故、人形は人形。人形に刑罰は与えず、代わりに廃棄処分となっていく。その時に人殺しの人形の後始末を請け負ったのが、人形機関の前身だと言われている。

そして、今度は誤りではなく、故意に機械人形を使って殺人を行わせる事案が発生した。

こうなるともう 歯止めが効かない。人間は人形に罪を被せることを覚え、殺し屋よりも人形に殺人の依頼設定をするようになった。人形機関はにわかに慌ただしくなり、同時に注目を集めることとな

る。

殺人人形を罰する権利を持つ機関。仕事の内容は人形の管理と、死刑。

死刑を行う者は人間であることが多かった。件の人形を見つけ出し、始末する。しかし、本当に危険だと判断される――例えば極めて性能が高い連続殺人の人形、凶悪殺人を犯した人形の元には、同じ機械人形が刺客として送られるようになった。

それが俺たち。死刑人形。

今も人形と人間社会の軋轢は生まれ、何事もなかったかのように始末されていく。

「――では、ウォーカー氏の家宅への潜入調査は、以下のとおりに行います。異論の無い方は拍手を」

円卓を囲む人間は一樣に手を叩く。

今行われているのは、それこそ人形劇みたいな人形裁判だ。

人形を裁き、行く末を定める場所。

「賛同の程、有難う御座います。では、本日はこれにより審査を終了させていただきます」

デルタは最後まで抑揚のない声で告げ、静かに深く礼をした。

人形機関の幹部は滞りなく部屋を後にしていく。

俺は資料を机にとんとんと叩いて整え、隣の彼女を見やった。

特にこれといった表情も浮かべずに、資料を読んでいる。

「ミュウ、終わったよ」

声を掛けると、面を上げた。

「うん。意外と早かったね」

「何よりだ」

席を立とうとすると――何時から潜んでいたのだろう、背後にはデルタが居た。

彼女は静かに腰を折り、慇懃に告げた。

「お時間を、よろしいですか？」

「…何の話か知らないけど、手短に頼む」

侍女の様子から、重要な事柄を伝えようとしていることを汲み取った俺は声音を低め、告げる。

頷いて、彼女は口唇を開いた。

「――お二人に、お話があります」

bl e s s

まさかもう一度、来ることになるなんて。

胸に蟠りを抱えながらに、私はビルを見上げる。

件の人物の代々家業である、進展企業が建て上げたビル。中には様々な企業やその宿泊施設が内包されている。尤も、百階よりも上は私的利用されており、実に個人的な空間だ。建物自体の所有者である彼もそこで寝起きしているらしい。

そのくらいは知ってる。だって私はこの間、ここに招かれたばかりだから。

あの時に感じた虚しさと嫌悪は、今も心中を占めて居座っている。何だか、変な気分。こういうのを不愉快っていうのかな。

人形には感情なんてない——という人間も居るけれど、実際には人形の感情というやつは、昨今の研究で発展し伸び続けた。人間のシナプス原理を応用した基本概念に基づき、私たち人の紛い物も、喜怒哀楽を身につけるものが始まるようになる。

でも、人間にとってはきつと無意味。

人間にとって機械人形は人形でしかない。感情なんて、与える仕事の阻害にしかないし、人形は家族じゃない。恋人にも親友にもなれない。そんな物体に感情の偽物を添付したところで結果は目に見えていた。

人形だって売買の商いだから、客である買い手の人間の要望に応えなくてはいけない。

そして感情を持つ人形というのは、需要も供給も少ない。

現在でも機械人形と言う区切りの中では、体数が最小の部類だったりする。

けれど、私たちは感情を持っている。

何でも、私たちの創造主である人形師フェーダクトが、本来、感情

を持つ人形しか造ったことがないという人形協会の異端者であり、私たちもその系譜にあたるらしい。

だから、私とアダーには喜怒哀楽がある。

怒ったり泣いたりという感情表現もできる。デルタは道徳を刷り込まれパターン化したものを設定しているだけなので、私たちのように感情を露にすることはまずないけれど。

一方で、人間らしい人形を薄気味悪く思う者もいる。

それはそうだと思う。怒ったり泣いたりとは人間の専売特許なのに、なんで生み出したのではない作り出したものにそんなことだできるのか？って、人間の考えそうなこと。

だって、それは――ある意味、脅威だから。

膨大な力を持つ人形、彼らが人間に反感とか、憎悪といった感情を抱いてしまったらどうなるのか――

そんな不安も、現実化しようとしているのが今。

それを食い止めるのも、人形機関の役目。

人形機関は人間と人形の潤滑油。人形の在り方を妥協して、人間に言い含む。

本当のことなんて、分からないのにな。

「ミュウ：？」

呼ばれて、振り向く。

声の先には予想通り、一人の青年が立っていた。

「大丈夫だよ」

微笑んでみせる。機械人形なんだから、本心を偽って笑うことなんて簡単なこと。

アダーは複雑そうな顔をした後、私の隣に並んだ。

「今、あいつは居ない。チャンスは一度だ。最低限の補助しか得られないけど……」

「頑張ろう。分かってるって。私は平気」

ぶらりと下がっていた彼の手を握り締め、離す。

眼前に聳えるビルは天まで届きそう。午後の日差しを浴びて、燦然

と輝く。仰いでいると首の付け根が滞りそうだった。

大丈夫、大丈夫：

言い聞かせるように繰り返す。

私は大丈夫。だから、心配なんていらない。

顎を引いて、前を見据え、足を一步踏み出した。

閑散としたビルの内側で、私とアダーは人目を避けて進む。

十数階まではそれぞれの会社のテナントや、宿泊施設が入っており、ビル内への侵入自体は安易に行える。問題は、防犯対策が万全に練られた百階からその上。

つまり、高い階層は私的目的で使われている。正確には、このビルの所有者の為だけの空間ということ。

デルタが報告した調査結果によれば、この場が一番、怪しいという。内部構造の地図は頭に記録してきたので、後は防犯カメラや使用人の眼を掻い潜って洗いざらしに部屋を調べていくことになる。

一つの階に三桁近い部屋数が揃っているのだから、波の作業ではない。

部屋を開けて見渡して：次の部屋へ。という大雑把な作業さえ、繰り返しの中で酷く疲れてくる。

自動施錠の部屋も、今は人形機関が依頼したハッカーが必死にこじ開けてくれている。

私たちに必要なのは、裏付け。

ウォーカーが殺人人形を隠し持っているという事実だった。

それが明るみにできれば、警察も日和見を決めていられない。つまり、人形機関が狙っているのはそれ。

私たちの仕事は、裏付けを見つけること。

私が奴の寝所に入ったのは、まあ、事前確認の為といったところ。

そんなものの為にあんなことをしたのかと思うと、不愉快だけど。
しょうがない。重要な決断にはそれ相応の判断材料が必要だから。

前に行くアダーは廊下の突き当たりの扉に身体を寄せる。

私もそれに倣い、部屋の内部の様子を探った。

無音。無臭。無熱。――人がいる可能性：おそらく無し。

二人して目配せをして、一気に部屋に入る。

薄暗い部屋。広い。遮光カーテンが締め切られている。

暗視のできる眼には、部屋の構造がありありと浮かんでいた。

一見、ホテルの最高級の宿泊室のよう。床には絨毯、天井は高く、
シャンデリアが吊ってある。塵一つなく掃除されていて、宿泊室と
いうよりは客間のような。

私とアダーは無言で部屋に入る。広い部屋を抜け、寝室へと向かう。
誰も居ない。

吹き抜けになったリフトにも登るが、人の気配はなく、不審物もな
かった。

ここもハズレか。

幾度目かの肩透かしを感じながら、私はアダーに、部屋を出ようと
促した。

しかし、彼はその場にしゃがみ込んだ。

眼を凝らすと――絨毯に引っかかって何かが落ちている。

『何、それ？』

内線で問う。

『：分からない。持ち帰ろう』

視認できたそれは、何かの破片のようだった。

もしかしたら、機械人形の部品の一部だろうか。もしそうならば、
これは貴重な証拠品だ。

アダーはすぐに立ち上がり、出口へと向かう。

私も後ろ姿を追おうとして――――

瞬間、浴室から伸びてきた腕に絡め取られた。

night

腕を掴まれ、強引に引かれた先は脱衣所を通り抜けた先の浴室だった。引力じみて強引に連れ込まれる。

大きなバスタブ、磨き抜かれた真鍮の取っ手や鏡がやけに目に付いた。

薄暗い部屋よりも更に暗い空間。

「いっ……！」

助けを呼ぼうとしたところで、扉が閉められた。

同時に、バランスを崩す。

私は、私の腕を掴んだ『何か』と纏れ合う形で風呂桶に倒れ込んだ。頭をぶつけないように受身を取ったが、その必要はなかった。後ろの誰かが、私の下敷きになって衝撃を緩和している。

「は、離して……っ！」

慌てて、ろくすっぽ背後も見ないで這い上がるのを、またしても阻まれた。

首に肘を掛ける形で引き込まれる。凄い力。

私はすぐに内線で彼を呼んだ。：少なくとも、呼ぼうとした。

『――、――、――、――、――、――、――』

絶句する。

通じない。なんで、どうして。

私を引き摺り込んだ相手は、私の首を腹部に手を回して、離さまいと拘束する。

食い込む五指を剥がそうと辛苦するが、ぎりぎりとう万力のように締め付けられるだけだった。この力、まず人間じゃない。

成人男性の十倍の馬力を持つ自分を造作なく押さえ込めるなんて。そうと分かれば、対応は早かった。

護身用にとってきていたシオルダーホルスターのデリンジャーを、

抜くと同時に相手に向けて放つ。

手応えがあった。

身体を掴んでいた手が痙攣を起こす。

その隙に肘鉄を食らわせて、私は起き上がった。

真っ直ぐに銃口を相手に。

――その時、初めて私は相手を見た。

「あ、あなたは……」

溜息混じりに、彼は撃たれた腕をぶら下げた。

さも残念そうに

「ああ、残念だな…折角の生体肢が……」

傷口からは、真っ赤な血の代わりに、透明な冷却液を垂れ流し

「久しぶりだね。会いたかったよ、フェーダクトの機械人形。…と

いっても、一昨日の晩にも会ったけど」

恍惚とした表情で微笑むのは、確かに一昨日ミュウを抱いたウォ

ーカーだった。

『ミュウ…?』

気が付けば、後ろに居た筈の彼女の姿が無かった。

いつもなら数秒ごとに行動を把握するなんて陳腐な真似はしないが、
場合が場合だ。俺はすぐに確認を取った。

しかし、返事が無い。

妙な胸騒ぎを覚え、俺は部屋へと引き返す。

相変わらず豪奢な室内には、人の影はない。

違和感は募り、奥の寝室へと向かった。やはり、誰も居ない。おか
しい。

彼女が俺に何も言わずに単独行動をするだろうか。よりにもよって
こんな時に。

『ミュウ、返事してくれ…』

内線は通じない。

彼女の身に何か起こったのか。

俺がそう思案していると、不意に風切りの音が響いた。

本能的に身を伏せる。

俺のすぐ背後の壁に、肉厚な何かが突き刺さった。：見ると、ナイフだった。

鋭利な照り返しは、寸分しゃがむのが遅れていれば身を削いでいたことを物語る。

「誰だ！」

叫ぶよりも先に銃を構えた。

何故もっと早くに気がつかなかったのだろう。出入口近くに、人影がある。

その時、ここではないどこから銃声が響いた。

銃の音質からして、小型の銃機——例えば、デリンジャーなどの携帯武器だろう。

待て——ミウが来る時に携えていたのもデリンジャーだった。ミウが発泡したに違いない。

しかし、眼前の敵に動揺した姿は晒せない。

俺は銃を抜き放つ。銃弾は吸い込まれるように相手への軌道を描いた。

肉を潰し骨を破砕する音——の代わりに、味気ない鈍い音が響く。

銃弾は相手の身体を貫いた。それは確かだった。けれど。

音は、肉体を穿ったものではなかった。

嫌な予感が現実となる。

相手は撃たれた足を引き摺り、歩み寄ってきた。

薄暗がり姿が浮かび上がる。撃たれたのが急所ではないからといっても、立ち上がり痛がる仕草さえ微塵も見せない。

やはり、機械人形だ。

顕著に分かった理由は、人形の顔にある。生体皮膚も表皮カバーさえも掛けられていない剥き出しの暗視スコープがぎょろりと焦点を

引き絞った。

躊躇いなく銃弾を浴びせ続ける。

しかし、機械人形は緩慢に近づいてきた。被弾する度に体が痙攣して仰け反る。

冗談じゃない。さっきから中枢神経の集まる上半身から頭部にかけてを連射しているのに――。

一対の距離は数メートル。

骸骨じみた人相を俺に向け、人形は跳躍した。

おぞましい剥き出しの造顔が、目の前に迫る。

「――っ！」

首に圧迫感――気がつけば、両手でしっかりと頸椎を握られている。あと少し力を加えれば、いともたやすく手折ってしまえそうだ。呼吸なんてしなくても問題はないが、中枢機関の密集する首から折られてしまえば流石に一溜りもない。

しかしそうはさせないと、俺はすぐに腕を阻み、人形と睨み合う。息の抜けるような、シュコーシュコーという音がやけに耳障りだった。

「……くっ」

無理やりに人形の腕を引き剥がし、代わりに銃口を額に突きつけた。途端、人形の動きはぴたりと止まる。

静止した沈黙。

暫しの邂逅の後、機械人形のスコープが狭まり、拡張する。

「AdriisPOO：人形師ローレル・フェーダクトの、遺産と……断定」

作り物じみた合成音声が、言の葉を紡ぐ。

密やかな驚きを感じながらも、俺はきつい口調で問うた。

「その名前を、何処で知った？」

――答えはない。

代わりに、通気口のような口元から呼気が漏れる。

微かに、息に混ざってケ―ブル線の香りがした。

銃鉄を引く。

「――答えろ」

声音を低め、再度尋問する。

しかし、返事はない。――代わりに

「その必要はないよ」

廊下の奥、暗闇の襖から響く声。そして這い出てくる気配。この音声は、聞き覚えがある。

俺は咄嗟に身構える。機械人形に当てた拳銃はそのままに、もう片手で銃を抜き出した。

声の主は足元からゆっくりと姿を現す。

「お前は……」

訝しみと怒気から出た言葉を、男は微笑みで受け取る。

現れたのは、気を失ったミュウを抱え平然と立つ、ウォーカーだった。

heart

相對する形のアダーと男は、機械人形を挟み睨み合う。

「答える必要はないよ。：君にはね、アダー」

せせら嗤い、ウォーカーは抱えたミュウを愛おしげに見つめた。

彼女の瞼は閉じられている。手足は脱力し、ウォーカーの両手に身を委ねていた。意識を失っているのか。

「ミュウに、何をした？」

噴き出す怒りを抑え込み、問う。隠しきれない殺気が口調に滲む。

「何もしていないよ。ちよつと電流を流したんだ。生体人形にも弱点とする電圧があつてね。案の定だ」

何もしていないという舌の根も乾かない内に、真逆のことを告げる。事実は逆しまだ。

アダーは眉を吊り上げたままに、銃口を二者に向けた。

機械人形と人間が一つつつ。一気に畳み掛ければ勝てない相手ではない。しかし、上手くいかなかった時はミュウの身にも危険が及ぶ。迂闊に動けない。

「殊勝だね、アダー、そんなにこの人形が大事？」

彼の齒噛みする心情を見透かしたように、軽薄に、酷薄に口端を歪め、ウォーカーはミュウの顔の輪郭をなぞる。蛇のような手つきが首を滴り、鎖骨辺りを撫で上げる。

「ミュウに触るな！」

閃光に似た一喝に、けれど相手は動じない。

「どうして？ 君たち人形は人間のものだろう？ 人間が人形をどう扱おうと、人間が人間を虐げる欲求の身代わりになっているのならば、それこそ尊い犠牲じゃないかな？」

さも不思議そうに、のたまう。

奔流の如き怒りが迫っているのを感じた。こんなに憤怒を露わにし

たのは何時ぶりだろうか。

とにかく、目の前の障害をブチのめさないと気が済まない——そんな気分。

予備動作もなく、眼前の機械人形が阻むようにアダーの前に躍り出た。

「：何のつもりだ」

「君の相手には丁度いいだろう。生体人形じゃないぶん、力量は君たちよりも勝る——E I D E S 197、彼を排除して」

E I D E——エイダと呼ばれた機械人形は腰だめの状態から直接襲いかかってくる。

両手の銃を咄嗟に翻し、横合いに退避する。

壁の碎ける音と同時に、元いた位置にはエイダが突進していた。

その両手は何かを捕らえようとしているかのように、がっちり壁に嵌っている。

戦闘用の機械人形。

アダーも噂には聞いたことがあったが、こんなところで出くわす羽目になるとは。

壁を砕いた一瞬後には、方向転換してまたアダーを狙う。

広い室内、回避を繰り返し、アダーは銃弾を放つ。しかし当たろうとも穿たれようと、エイダは機能を損なわずに邁進を続けた。

人形にも人間でいう心臓のように、弾丸一発で機能停止に至る急所がある。

しかし人間との相違点は、それが何処にあるか分からないということだった。実際に、アダーとミュウの急所も胸とは別にある。

運良く頭部を破壊できても、それが作動的全壊に繋がるとは限らない。

中枢部が頭でない限り、頭を失っても機械人形は行動し続ける。

アダーが今まで撃った箇所は、脚、手、肩、頭の脇辺り：未だに当たりは引いていない。

しかし、猪突を回避しながら立ち回り銃を放つこと自体が、まず人

間離れた技だった。アダーでなければすぐにでもエイダの全霊の打撃を受け、内臓破裂や全身骨折に伴う死を招いていた筈なのだから。

避けた場所にあったテーブルが、機械人形の突撃によって碎かれる。木片が飛散し、部屋の中を舞う。その中に剥き出しの暗視スコープの眼球を見た。

エイダは無手だ。

徒手空拳であえて全身を砲弾にしてむかってくる。全身が近接戦用武装なのだ。

そのような相手に、この間合いで何を行えと。長距離狙撃でも動物は狙いにくいというのに。

床から跳躍し、宙空で二発連続で撃ち抜く。

魚眼レンズじみた視線は、獲物を捉えたまま痙攣しただけ。

何処かに、一発で仕留められる場所がある筈なのだ。

心臓の位置、頸椎の位置、脳味噌の位置、脳髓の位置、鳩尾から腹部に掛けて……

全身を一斉掃射で穴だらけにしなければ分かりそうもない。

人形の心臓たる機関部は、拳程の大きさ。そうそう目視では探し出せない。

両手に持っていた銃の一方を、天井に向け投げ捨てる。

くるくると回転した銃器はリフトに上がり、片手が開いた。

エイダが向かってくる。

敢えてアダーは避けずに、代わりに屈み込み、床を転がった。

標的を失った視界の中、機械人形は慣性を殺して立ち止まろうとする――刹那。

アダーは上着から取り出した何かを、エイダの足元に叩きつけ、同時に受身を取って反対側に飛び込んだ。

反対側とは、即ち窓。

激しい破碎音と共に肢体を投げ出す。

眼下は地上百階の俯瞰空間。

アダーは寸でのところで窓枠に掴まり、もう一方の銃も階下に投げ捨てると両の五指でしかと身体を吊り下げた。

続いて、激しい爆発音が木霊する。

部屋の内部では、硝煙と爆炎が上がり、それにより危険を察知した警報機が大量の水を降らす。

炎は窓から外へと吹き荒れ、怒涛の勢いで開放されていく。

その流れの中、人型を模した火達磨の影が、ガラクタみたいに押されて地上数千メートルの空に投げ出される。

機体を焦げ溶かしながらに、炎を纏った機械人形は小さくなっていった。

アダーはそれを見届けることなく、一息で部屋へと這い上がった。壁は焼け焦げ、炎の紋を残し、ソファやベッドも綿の部分がごっそり消失している。

アダーが、先ほどエイダの足元に投げたのは、直下型の爆雷だ。大きさは手榴焼夷弾と変わらないが、その絶大な熱量と衝撃から爆雷と例えられている。

一瞬にして業火を巻き、数秒で収束する。ただし、焼け跡には塵さえないのこらない。証拠隠滅や多勢相手には好都合な武器だろう。

溶けかけた火災警報器が、水を壊れた水道みたいに垂れ流す。均等に降り注ぐそれを払いながら、アダーは一言呟いた。

「…逃げやがったな、あいつ……」

見渡す部屋。その何処にもミュウとウォーカーの姿は無かった。

暗い、泥沼みたいな醜鈍な意識。

人間が覚醒と称する、目覚めの感覚。私にとっては現状把握と機能開始の感覚。

感覚情報はまず視覚から入り込む。人間だって、外界識別の手段の九割を視覚に頼っているのだから、人形の私がそれに倣っていても何もおかしいことはないと思う。

だから、私はまず目蓋を押し開ける。

しかし、外部の状態がどうであるかを判断する、一切を遮断する壁が現れた。

やけに窮屈だと思ったら、とても狭い。足も満足に伸ばせない。四角い箱の中に詰められているみたい。それこそ荷物みたいに。

ふと、人形が飛行機に乗るときは、やっぱり貨物扱いされるのかな——なんて思った。今はどうでもいいことなのに。

耳を済ませても音はないし、更に眼を皿にしても映るのは遮断する平坦な何かだけ。

私は身体を丸めた状態から身動き一つできない。

試しに、軽く足先で壁を蹴る。軽くと言っても、私がちょっと蹴っただけでも人間のキックボクサーの全力並みの衝撃はあるのだけどがつん、と音がして、爪先から伝動式に反発力が返ってくる。

でも開かない。よっぱど丈夫な素材で出来てるみたい。

「…ねえ、出して！ 誰か！」

声を張り上げる。箱の中で反響して耳に喧しく響くけれど、文句なんて言ってもらえない。

返ってくるのは静謐だけ。

周りには誰も居ないのかもしれない。困った。物凄く。

今度は体内通信でアダーに呼びかけてみるけれど、こちらに通じな

い。自分の中の嫌な予感が風船みたいに膨らむ。弾けそうになる。駄目だ。少し落ち着こう。順を追って、何でこんなことになっているのかを考えなきゃ。出ることは優先順位第一だけど、それでも思考することがその近道になるだろうし。

今日の日付が変わって居なかったら、きっと今はウォーカーの所有するビルに潜入したその日のまま。だから、何かあったのなら該当はその時分になる。

でも、潜入してからの記憶が曖昧。どうしてだろう。

幾つか部屋を回った所までは覚えているのに、記憶は呆気なく途切れている。

記憶媒体が故障でもしたのだろうか。だとしたら大事だ。修理をしようにもここには人形師も居ない。

記憶から手掛かりを得るのはきつと難しい。

今、自分に今出来ること――

もう一度、六面を覆う壁を蹴っ飛ばす。

短絡的な行動の結果は明白で、びくともしない。虚しくなってくる。特殊金属か何かの、それこそ金庫にでも收容されちゃったのかも知れない。でも、誰が、どんな目的で？

拘禁される理由は――人形機関の刺客をしているという側面から言えば限らないけれど、今回ののは違う気がする。そもそもアダーと二人一組みで行動している間は、そんな心配は要らなかったもの。だから、現時点まででイレギュラーと呼ぶべき何らかの相違点がある筈。

生身の人間ならばとくに酸素不足に陥っているだろう、密閉された空間。きっと何か意味がある。

頭が思考に切り替わろうとした瞬間、それは落ちてきた。

「――ひゃっ！」

思わず、悲鳴を漏らす。

足首に触れる感触が後引き流れていく。

冷たい液体が滴っていく。ぽたぽたと触れるのは、まるで中途半端

に開いた蛇口みたいに。

足首に水滴がぽたぽたと落ちてくる。

「…水…」

どこから落ちてきているのだろう。

密封された空間には、蛇口を入れる隙間なんて無い筈なのに。も

しかして、あるいは――

足元に、蛇口が取り付けられている…？

脚部の濡らされる面積が、段々と広がっている。

例えば、水を入れる口があったとして――水の出口がなければ、どうなるだろうか。

それを考えた途端、ぞっとした。

これは水責めだ。

密封された満杯の水桶の中に、私の身体を沈めるつもりだ。

せめて私が人間の肉体のような脂肪による浮力を持っていれば良かった。けれど効率性を求めて無駄を削ぎ落とした人工生体肢にそんなものはない。ただ、浅い水深で重みに任せて沈没するだけ。

酸素を取り込み二酸化炭素を排出する呼吸という行動は、機械人形である私には本来必要ない。だから問題は空気の有無で溺れ死ぬことよりも、寧ろ、長時間の水責めが体に掛ける負荷。例えば体温：所謂、熱活動効率を活動し安い一定に保つことで、体力を奪われる危険性だと分かる。

その上、水を飲み込み過ぎれば、擬似気管から中枢部に届かないとも限らないと思う。少量ならまだしも、咳き込んで多量に取り込めばまず致命的な故障に繋がる。

そうしたら、一環の終わり。

機械人形ミユウの生命は絶えたということになる。

勿論、そんなの御免だ。

誰かに助けて貰うか、自力で何とかするか。二つに一つ。

けれど、自らでどうにかする道は殆ど閉ざされてしまった。私は文字通りの箱の中の猫になってしまったから。

箱が水で溢れるまで、多く見積もっても数時間。私の命運はきつと試されている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1598y/>

ハロー、コッペリア

2011年11月18日06時03分発行